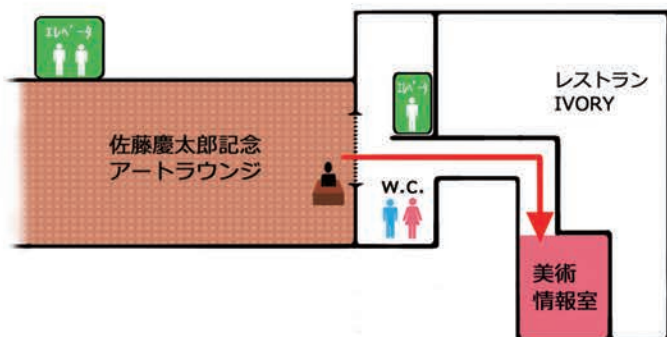


美術情報室について

美術情報室は、東京都美術館 1 階の佐藤慶太郎記念アートラウンジにある《佐藤慶太郎像》横の自動ドアを通り抜けて、突きあたり右手にございます。



美術情報室の資料は、どなたでも自由に閲覧することができますが、貸出は行なっておりません。詳しいご利用方法については、別紙「ご利用案内」をご覧ください。

ライぶらり vol.2

「TOKYO 書 2013 公募団体の今」展 編

東京都美術館コレクションによる「現代の書のあゆみ」展 編

発行：  東京都美術館 × 東京藝術大学 とびらプロジェクト 2013年 1月 3日

執筆： とびラー候補生

編集： kamiya / ohara / sato / tamai / yamanaka / yoshikawa

協力： 東京都美術館 美術情報室

「とびらプロジェクト」とは、美術館を拠点に、アートを紹介したコミュニケーションを促進し、オープンで実践的なコミュニティの形成を目指すプロジェクトです。美術館での体験が人々にとってこれまでよりも深められ、新たなコミュニケーションを生むきっかけとなることを目指します。そして、美術館のある暮らしの中でのさまざまな体験の質を深め、共有する場を支え、アート・コミュニティをつくっていくのがアート・コミュニケーター「とびラー」です。このプロジェクトは、東京都美術館と東京藝術大学が協力して運営していきます。



「TOKYO 書 2013 公募団体の今」展 編
東京都美術館コレクションによる「現代の書のあゆみ」展 編

2013年1月4日（金）～2013年1月16日（水）

東京都美術館の特別展・企画展等に
関連する書籍を紹介する情報誌



美術情報室はアートを
より深く知ることの出来る場所です
展覧会を見る前に予習をするもよし
余韻に浸りながら復習をするもよし

ようこそ
美術情報室へ！！

おすすめ書籍一覧



別冊太陽 日本のこころ191 「日本の書 古代から江戸時代まで」

名兎耶明(監), 湯原公浩(編), 2012年

古代から江戸時代までの書の歴史を振り返り、空海や一休、良寛といった日本の偉人たちの作品の数々を、わかりやすい解説とともに堪能できる一冊。書をもっと楽しめるQ&Aや、鑑賞のための7つのキーワードつきで、はじめての方でも安心して書に親しめます。

説明の丁寧さ度 ★★★
コラムおもしろ度 ★★★
有名な偉人たち度 ★★★



「書を楽しもう」

魚住和晃(著), 2002年

書の魅力をコンパクトにまとめた一冊。芸術としての書の歴史を王羲之から紐解き、空海や良寛、さらには坂本龍馬、樋口一葉、片岡鶴太郎など近現代の作家の書を取り上げます。一方で、書家ならではの筆者の視点で語られる筆力のメカニズムは、観るだけでなく、書く人にもオススメです。企画展で目を肥やした後は、書き初めに挑戦してみては!?

基礎知識度 ★★★
お役立ち度 ★★★
図版充実度 ★★★



「書・二十世紀の巨匠たち」

田宮文平(著), 2006年

第二次大戦後、日本書道史の躍動期に活躍した“巨匠たち”。それぞれの出自や作風、書壇との関わりなど人間味あふれるエピソードが満載です。同名DVDから抜粋した筆法の写真資料なども多い、書への理解がより深まります。巻頭には「二十世紀の書」の成り立ちをまとめた総論を収録し、入門編としてもオススメです。

人間ドラマ度 ★★★
作家への愛情度 ★★★
歴史を知る度 ★★★

「ライぶらり」は、東京都美術館のアート・コミュニケータ(愛称:とびラー)がお贈りする不定期発行の情報誌です。特別展・企画展等に関連したおすすめの本をご紹介します。掲載されている書籍は全て、美術情報室で閲覧が可能です。



「決定版 日本書道史」

名兎耶明(監), 2009年

日本における書道史を一冊の本にまとめた決定版。各時代の代表的な書の紹介を交えながら様式の変遷をたどります。その他語句説明や様々なコラム(筆の歴史から書論史まで!)も収録されており、書について多様な知識を学びたい方におすすめの一冊。

展覧会シンクロ度 ★★★
勉強になる度 ★★★
歴史どっぷり度 ★★★



日本の美術IV 「書一戦後六十年の軌跡」

田宮文平(監), 2005年

表題の題字は日本画家の高山辰雄、表紙カバーには書道家の森田子龍作《風》(一部)を使用しており、モダンな雰囲気の色紙が目を惹きます。現代の書を築いた巨匠から新鋭の作家まで、カラーの作品図版が豊富です。巻末資料も充実!

圧倒的作品掲載数度 ★★★
重量度 ★★★
見て感じる書の多様さ度 ★★★



墨 ニュークラシック・シリーズ 次世代に伝える 21世紀の新古典 「松井如流」

松井如流(書), 中嶋治(編), 2012年

松井如流が生涯をかけて追求した「心形一致」の境地。書の技法だけでなく、それを書く者の心が大切だと述べている通り、如流の作品を見ていると、温かい人柄が伝わってくるようです。特に一字書などは、文字の造形の美しさや濃淡、さまざまな墨色の美しさが感じられ、本を眺めるだけで癒されます。個人的に107ページの《奥》がお気に入り。

部屋に飾りたい度 ★★★
書家の多才度 ★★★
ほとんど全部漢字度 ★★★